

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

保健医療学部
リハビリテーション学科作業療法学専攻

増田 雄亮

(2026 年 5 月 26 日作成)

1. 教育の責任

本資料作成者である増田雄亮（以下、作成者）は、保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の教員として、以下の授業科目を担当している（見学実習・地域リハビリテーション実習・評価実習・総合臨床実習は割愛）。各授業のシラバスは、湘南医療大学 WEB ポータルサイト上で本学学生並びに教職員に公開されている。

科目名	開講	必修・選択	受講者数	単位数
運動学Ⅱ （作業療法学専攻）	2 年後期	必修	30～40	1
運動学演習（応用） （作業療法学専攻）	3 年前期	必修	30～40	1
身体障害作業療法学Ⅲ（応用） （作業療法学専攻）	3 年後期	必修	30～40	1
作業療法管理・運営Ⅰ （作業療法学専攻）	3 年後期	必修	30～40	1
クリニカルリーズニング （作業療法学専攻）	3 年後期	必修	30～40	1
生活支援機器論 （理学療法・作業療法学専攻）	3 年前期	選択	40～50	1
作業療法評価学（身体Ⅰ） （作業療法学専攻）	2 年前期	必修	30～40	1
作業療法基礎ⅢB （作業療法学専攻）	3 年前期	必修	30～40	1

作業療法学専攻の専門科目として、「運動学Ⅱ」「運動学演習（応用）」「身体障害作業療法学Ⅲ（応用）」「作業療法管理・運営Ⅰ」「クリニカルリーズニング」「作業療法評価学（身体Ⅰ）」を担当している。

「運動学Ⅱ」「運動学演習（応用）」は、解剖学・生理学と並ぶ基礎医学であり、国家試験対策として非常に重要な位置づけにある科目と認識している。そのため、授業内では国家試験問題を解くための知識を教授するとともに、毎回の小テストで国家試験問題を提示して学生に解いてもらう機会を積極的に取り入れている。

「作業療法評価学（身体Ⅰ）」「作業療法基礎ⅢB」は、3 年次の「評価実習」に接続する流れを強く意識した授業展開として、身体領域作業療法評価に関する講義・実技演習を行っている。実技演習は両科目合わせて 5 回実施しており、学生が主体的に実技の修得が行えるような授業構成を心がけている。実技試験の修得が基準に達しない場合は、面談や再試験などを柔軟に取り入れて、学生指導に当たっている。

「身体障害作業療法学Ⅲ（応用）」「クリニカルリーズニング」「作業療法管理・運営Ⅰ」は、3 年次「評価実習」、4 年次「総合臨床実習」前の科目配置であることから、作業療法臨床の流れを強く意識した授業展開として、事例を提示してグループ学習を行っている。ガイ

ドラインや論文などを参照しながらエビデンスに基づいた作業療法実践を意識できるように、学生自らが能動的に問題解決を行う形式を採用している。

作業療法学専攻・理学療法学専攻の共通科目として、「生活支援機器論」をオムニバスで2コマ分担している。昨今の急速な人工知能・テクノロジーの発展を背景として、これらに応用した生活支援機器について講義を行っている。選択科目であることも鑑み、なるべく学生が興味あることを探求し、近年の人工知能・テクノロジーの発展とリハビリテーションへの応用に興味を持てるように工夫している。

本学での授業の他に、以下のような活動を通して、学内・学外で得られた情報を教育活動に活かしている。

- 1) 各種委員会（教務委員会、大学院研究科委員会、他）
- 2) 日本リハビリテーション連携科学学会, 国際委員会 副委員長
- 3) 神奈川県作業療法士会, 代議員
- 4) 神奈川県作業療法士会, 学術誌「神奈川作業療法研究」編集委員
- 5) 日本リハビリテーション連携科学学会, 「リハビリテーション連携科学」査読者
- 6) 日本作業療法士協会, 学会企画委員会 学会演題査読者
- 7) 日本リハビリテーション連携科学学会, 理事
- 8) 日本リハビリテーション連携科学学会, 研究推進委員会 委員
- 9) 日本作業療法士協会, "Asian Journal of Occupational Therapy" 編集委員会 査読者
- 10) 日本作業療法士協会, 学術誌「作業療法」編集委員会 査読者
- 11) 日本作業療法士協会, 現職者共通研修会講師「事例報告と事例研究」

2. 教育の理念・目的

1) 教育の理念

「作業に焦点を当てた実践」を基盤として、「エビデンスに基づく実践」の方法論を理解し、臨床実習を通して作業療法学と基礎医学（解剖学・生理学・運動学）の統合が行えることを学生に期待している。これを実現するために、「運動学II」「運動学演習（応用）」では、解剖学・生理学と関連付けた講義を展開し、作業療法学への応用を教授している。「身体障害作業療法学III（応用）」では、「作業に焦点を当てた実践」と「エビデンスに基づく実践」に関する知識と技術を身に付けてもらえるように、コミュニケーション演習・問題解決型学習などを積極的に取り入れている。作成者は、回復期リハビリテーションと生活期リハビリテーションの現場において作業療法士として臨床経験を重ね、研究も同領域のことが多い。これらの臨床と研究を直接教育に還元できている点が作成者の特徴的な点である。

2) 理念をもつに至った背景

特に身体障害分野における作業療法士は、その歴史的背景から、専門職としての同一性（アイデンティティ）を確立できない時代が存在した。作業療法士のアイデンティティが比較的確立し、作業行動理論が教育的に普及するようになったのは2010年以降である。近年では、「作業に焦点を当てた実践」として普及しているが、この概念を獲得するためには、卒前・卒後教育の中で一貫して「作業」と「作業に焦点を当てた実践」について学生自身が理解を深める必要がある。これらを深く理解できることが、クライアントに作業療法士とし

て専門的な視点を持って対峙するために必要不可欠であると考えている。

一方、上記のみでは臨床家として不十分である。病院で働くためには、基礎医学・臨床医学と作業療法学との統合が欠かせない。また、臨床疫学と生物統計学から派生した「エビデンスに基づく実践」について理解し、エビデンスをクライアントに適応するプロセスを実行できる知識と技術を学生に身に付けてもらう必要がある。これは、作業療法学が科学の一分野であると同時に、作業療法士が科学的根拠に基づいたセラピーを実施していることを伝えていくために大変重要であると考えている。「作業に焦点を当てた実践」「エビデンスに基づく実践」に加え、基礎医学・臨床医学・作業療法学を統合できることで、作業療法士はチーム医療の一翼を担う存在として機能するものと考えている。

3. 教育の方法・戦略

【概要】

作成者は、上述の教育理念を達成するために、担当科目毎に到達目標に応じてさまざまな教育方法を適応している。「運動学II」「運動学演習（応用）」では、国家試験を念頭に入れた知識を定着してもらうために、定期的な小テスト実施や **Team-Based Learning** を積極的に採用している。「身体障害作業療法学III（応用）」では、「作業に焦点を当てた実践」と「エビデンスに基づく実践」の統合、基礎医学・臨床医学・作業療法学との統合を目指して、個人学習・グループ学習・**Problem-Based Learning** などを積極的に採用している。

【方針】

作成者が担当する授業科目では、学生が主体的かつ能動的に取り組めるような教育方法を導入している。基礎医学系の科目である「運動学II」「運動学演習（応用）」では、国家試験を意識した知識定着を図るための授業に加え、臨床運動学の視点からクライアントの動作を分析する力を養うような授業を展開している。「身体障害作業療法学III（応用）」では、「作業に焦点を当てた実践」と「エビデンスに基づく実践」の深い理解と、基礎医学との統合を目指して、事例検討を中心とした臨床的な能力を培うことを主眼とした教育方法を展開している。

【方法】

- ・ 小テストの実施

国家試験対策として役立つ知識の定着を目的として、毎回小テストを実施している。前回分の講義内容を学生に復習してもらうと同時に、授業に対する前向きな姿勢を促進する意図も含んでいる。小テストは、**Google Forms** で作成し、学生のスマホから回答可能な形としている。

- ・ **Team-Based Learning**（TBL）

上記、小テストを個人で受験した後、グループで議論してグループ回答を作成し、同様に **Google Form** へ回答してもらっている。自動採点でフィードバックされるように設定しているため、グループ回答の正誤がすぐに分かり、モチベーションにも繋がると考えてこの手法を採用している。

- ・ **Problem-Based Learning**（PBL）

身体障害作業療法分野における脳卒中事例をペーパーペイシェントとして学生に提示し、評価→統合と解釈→目標設定→プログラム立案までの流れをグループメンバーで協

力しながら取り組んでもらっている。自ら考え、調べ、協力し、教員に指導を求め、という能動的な学習を展開できる点が利点と考えてこの方法を採用している。

4. 学習成果

- 令和 6 年度授業評価アンケート結果「運動学Ⅱ」

履修者数 41 名に対して回答者数 12 名であった(回答率 29.27%)。各項目のスコア(2023 年度)については、意欲 4.67(4.48)、理解 4.50(4.52)、向上 4.67(4.63)、自発的 4.67(4.52)、探求 4.67(4.33)、熱意 4.83(4.78)、教え方 4.75(4.74)、コミュニケーション 4.83(4.78)、板書 4.75(4.85)、環境 4.83(4.70)、総合 4.83(4.81)であり、2024 年度はすべての項目で学部学科平均と同等もしくはそれ以上のスコアであった。この要因として、毎回の WEB テストの導入と解説が挙げられる。毎週、授業の復習を促すことで本科目へのモチベーションをキープでき、学生の能動的な学習へ繋がったものと思われる。前回リフレクション時の課題であった意欲・探求についてもスコアの向上を確認できた。作業療法士としての運動学の意味を伝え、臨床と結び付け、能動的に探究していける授業を展開していきたい。

- 令和 7 年度授業評価アンケート結果「運動学演習（応用）」

履修者数 41 名に対し、38 名より回答が得られた(回答率 92.68%)。昨年度は、5 名のみの回答であったため、大幅な回答率向上が見られた。各質問項目のスコアでは、向上 4.55、熱意 4.63、教え方 4.53、コミュニケーション 4.53、板書 4.63、環境 4.58 については学部・学科平均以上であったのに対し、意欲 4.45、理解 4.37、自発的 4.34、探求 4.37、総合 4.47 については若干ながら学部・学科平均未満であった。上記より、教員による講義自体は一定の評価を得ているものの、学生の主体的な学習意欲については課題が残る結果であったといえる。運動学は、作業との関連性が見えづらいため、モチベーションを維持しながら授業に参加しづらい学生は多いのではないかと推察される。来年度も引き続き、運動学と作業療法学との関連性を臨床と結び付けながら伝えていくことで学習意欲を高めていきたい。

- 令和 6 年度授業評価アンケート結果「身体障害作業療法学Ⅲ（応用）」

履修者数 32 名中 9 名が回答した(回答率 28.13%)。各項目のスコア(2023 年度スコア)については、意欲 4.33(4.65)、理解 4.56(4.46)、向上 4.56(4.58)、自発的 4.11(4.46)、探求 4.33(4.42)、熱意 4.78(4.73)、教え方 4.67(4.58)、コミュニケーション 4.89(4.54)、板書 4.89(4.46)、環境 4.44(4.42)、総合 4.67(4.62)であった。また、理解、熱意、教え方、コミュニケーション、板書、総合スコアは学部学科平均を上回った一方、意欲、向上、自発的、探求、環境のスコアは学部学科平均を下回った。これらの結果は、講師による教授法は一定の評価を得ている一方で、学生が主体的に取り組むアクティブラーニングについては課題が残るものと解釈できる。特に、意欲、向上、自発的、探求については、昨年度のスコアよりも低下していた。2024 年度より本科目は教員 3 名によるオムニバス科目へシフトした。教員間で連携を図り、各教員担当の 5 コマの中で学生がより主体的に授業に参加できる体制を創っていきたい。

- 令和 6 年度授業評価アンケート結果「作業療法管理・運営Ⅰ」

履修者数 32 名に対して回答者数 7 名であった(回答率 21.88%)。各項目のスコアについては、

意欲 4.43、理解 4.57、向上 4.43、自発的 4.43、探求 4.29、熱意 4.71、教え方 4.71、コミュニケーション 4.86、板書 4.86、環境 4.71、総合 4.71 であった(2024 年度より教員変更のため、2023 年度のデータなし)。学部学科平均スコアと比較すると、理解、教え方、コミュニケーション、板書、環境、総合は上回った一方、意欲、向上、自発的、探求、熱意は若干ながら下回った。なるべくわかりやすく教えようと努めたため、教授法については一定の評価を得ていると思われるが、学生が自ら主体的に参加する点については低めの評価であったと思われる。グループ学習などを取り入れ、能動的に考える機会を提供できるように改善していきたい。

5. 改善のための努力

- ・ 「運動学Ⅱ」

座学中心の講義となるため、学生の能動的な学習を促す工夫が必要である。引き続き、小テストや TBL を導入するとともに、その制度を高めていきたい。具体的には、小テストの問題形式を選択式ではなく、間違いを修正する形に変えるなどして、より深い理解を促していく方法が考えられる。

- ・ 「運動学演習（応用）」

筋骨格系の復習として、解剖学関連の復習と小テストを行ってきたが、知識定着の不十分さや作業療法学との関連性が十分に伝わっていないことが課題と考えている。グループ学習で調べ学習を学生に促しつつ、臨床での活用方法をわかりやすく伝えていく努力をしたい。

- ・ 「身体障害作業療法学Ⅲ（応用）」

これまで学んできた身体障害作業療法関連の統合を目指しているため、内容が過多になってしまう傾向がある。授業構成と効率的な教育方法を一層充実させていく必要性を感じている。

6. 今後の目標

【長期目標】

- ・ 担当科目全てにおいて、国家試験・臨床実習と密接にリンクさせた教育が行える。
- ・ 学生が能動的に授業に参加できるように、多様な教育方法と教育評価を組み合わせる授業を展開できる。

【短期目標（令和 8 年 4 月）】

- ・ 授業評価に診断的・形成的評価を取り入れる。
- ・ 小テスト・TBL・PBL の精度を高め、国家試験・臨床実習にリンクさせた教育が展開できる。
- ・ 90 分の授業を効率的に展開できるように、アクティブラーニングの教育方法を復習し、担当科目に 1 つずつ導入できる。